FROM United Kingdom

中野香織

# ㉔シュミーズとケミストリー

「僕には二つの愛がある。君と…そして君」ですか。こんなセリフを〈男の中の男〉ギャバンに刻印させてしまうとはさすがディートリッヒ。でもまあ、「一時だけ燃え上がってやがて冷める恋」によく似合うセリフではありますね。（ひがみ、入ってます）。

ところで、実に久々に、映画の余韻で夜眠れなくなる、という経験をいたしました。「リード・マイ・リップス」です。監督&脚本のジャック・オディアールって、クロード・ミレールの「死への逃避行」(82) の脚本も書いてるんですね（父のミシェル・オディアールと共同で）。実はこの映画も「余韻が濃すぎて眠れなくなった」一本で、主演のイザベル・アジャーニのポスターは今でも私の部屋の壁を飾っております。

で、眠れなかった記念に「リード・マイ・リップス」のポスターも飾ろうと思ったんですが、これがだめなんですよ。主演二人がスクリーンを離れて写真になると、ばばっちくて。ム所を出たばかりの鼻血まみれチンピラ役のヴァンサン・カッセルと35歳独身難聴もち性悪ブスOL役のエマニュエル・ドゥヴォスだもん。

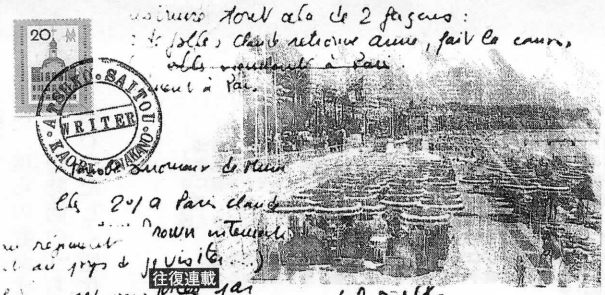
でも、この「美男美女の範疇に入らない」二人が、映画が終わる頃になると、この上なくセクシーに見えてくるんですよね。この変化の過程がもうフランス映画的としかいいようがないニュアンスに彩られていて。

ヒッチコックにオマージュを捧げたとおぼしき設定もありますが、わかりやすい美男美女好みのこのイギリスの監督が描けなかったであろう（というか描く興味はさほどなかったであろう）官能の機微というかケミストリー〈男女間の化学反応〉の秘奥のようなものを、オディアールはにおいたたせていますね。粗野なカッセルの汗と血がしみこんだ臭そうなシャツを陶然と裸体にまとう地味ブス・ドゥヴォス！　シャツを意味するシュミーズ(chemise)とケミストリー(chemistry)のつづりが似ている真の理由を知らされた瞬間でした(うそ)。

最後に二人が絆を確認するのも、唇を合わせることではなく（唇のアップはふんだんに出てくるのに）スカートに手を入れることから、というのもフレンチ・エロスの底力(か?)を感じさせる演出ですね。

ロウワーでクズ同然な個体が二つ、化学反応を起こすことによって信じがたい力を生む。その触媒として働くのは、歯の浮くような言葉ではなく臭いシャツ。しびれます。でも現実に喜ばしいのは歯の浮くような言葉(入りブレスレット)。まあどっちにせよ、フランス男が扱ってなんぼの世界であることには変わりませんが。

「リード・マイ・リップス」●9月20日よりシネマライズにて



往復連載

齋藤敦子
中野香織

# ドーバー越えて

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来10数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

カット・井上陽子